

兵庫県神崎郡市川町 山王1号墳測量調査報告

京都府立大学文学部考古学研究室

1. 調査の経緯

山王1号墳は、兵庫県市川町沢の北端に位置し、神河町と市川町の町境にある。南にある猿田彦神社の麓に所在する2号墳、さらに神社の境内にある3号墳があり、いずれも横穴式石室をもつ後期古墳である。それらのうち猿田彦神社の麓にある山王2号墳では、発掘調査がおこなわれ、横穴式石室の中から圭頭大刀の把頭が出土している。ほかに馬具や鉄鏃も出土しており、後期の有力者の奥津城と考えられている。そして、山王1号墳はさらに大型の横穴式石室をもつ後期古墳として知られており、天井石も含め良好な遺存状態であるが、実測図などは知られておらず、実態がつかみにくい憾みがあった。これまで京都府立大学では、神前郡神河町内の後期古墳について測量調査をおこなってきたが、『播磨国風土記』記載の神前郡埴岡里に含まれる古墳として本墳をはずすことはできないと考え、測量調査をおこなうこととした。調査は2017年4月28日から5月1日にかけておこない、石室の実測に合わせて、トータルステーションによる墳丘の測量も実施した。調査に際しては、前川好文区長をはじめとする沢区のみなさま、および市川町教育委員会の原田和幸氏にたいへんお世話になった。改めて謝意を表したい。本調査は、平成29年度科学研究費補助金（研究種目 基盤研究（B））「古墳と風土記からみた常陸7世紀史の研究—播磨との比較を通じて—」（代表：佐々木憲一明治大学教授）の成果の一部である。

調査は、京都府立大学文学部考古学研究室の菱田哲郎と加東市教育委員会の藤原光平を中心に、以下の学生の参加を得て実施した。

近藤史昭、上井佐妃（京都府立大学大学院生）、齋藤直樹、箕浦絢（明治大学大学院生）、陰地祐輝、新尺雅弘、大須賀広夢、岡田大雄、小野大樹、中村美琴（京都府立大学学生）

2. 古墳の歴史環境

すでに触れたように、本古墳は市川左岸にあり、市川町沢と神河町新野の境界に接して位置している。近くにある猿田彦神社は、市川町沢、美佐だけでなく神河町新野もかつて氏子圏としており、町境を挟むものの、地域としては新野、沢、美佐が一体であったことが知られている。これは、中世の荘園についても明らかで、新野荘が沢や美佐も含んでいたと想定されている。また、地域に残された伝承では、新野の御所山について中世の貴種流離譚が残されているが、沢にも御所の地名があり、両者に関係があったと伝えられている。新野には後期の横穴式石室をもつ新野山根古墳があり、その北側に清水山古墳群があった。この新野の古墳群と沢の山王古墳群とを関連づけて捉えることが必要であろう。



図1 山王1号墳と周辺の後期古墳

(2万5千1地形図「粟賀町」「寺前」を50%縮小)

古墳時代から奈良時代の集落は、新野山根古墳の周辺にあったと考えられ、北野遺跡とされているが、調査はおこなわれておらず、採集資料からの推測にとどまる。一方、市川町沢では、サルガク遺跡と沢構跡が発掘調査され、弥生時代や奈良時代を中心とする遺構、遺物が発見されている。奈良時代の遺物には墨書土器が多く含まれる点が特徴的である。ただし、6、7世紀の資料は知られておらず、山王古墳との関係は不明である。

市川上流域は奈良時代には『播磨国風土記』神前郡壱岡里の領域に含まれると考えられるが、図1に示したように、横穴式石室を内包する後期古墳が点在している状況が知られている。この分布のあり方から、それぞれが古墳周辺の平野部を背景とする勢力とみなすことができ、

開発の進展をうかがうことが可能である。中でも城山古墳群、高畑通古墳群、そしてこの山王古墳群は石室の規模が比較的大きく、この地域を代表する後期古墳であると評することができる。それぞれが、3ないし4基程度の古墳がまばらに分布するという点でも共通性があり、地域の中で一定の造墓原理が働いていた証左となろう。(菱田哲郎)

3. 墳丘

山王1号墳の墳丘は、丘陵の東の裾に位置し、円墳である。墳丘の北西側は山の斜面に接続し、その間を里道が通っている。東側は市川町沢と神河町新野をつなぐ道路が通っている。また、開口部の前面は平坦部となっているが、それを画するように後世の溝があり、もともとの地形から大きく改変を受けている。

地形測量を行った結果、等高線から墳丘の破壊状況を把握できた。南西側は等高線が不整形で、開口部の前面では崩落が起きており、石室の石材が露出している。また、道路に面する南東側の側面が直線的で、かつ裾が急傾斜になっており、この道路の設置にともなって削られたと考えられる。このほか、奥壁付近の天井石が一部露出していることも明らかになった。しかし、墳丘の北東側では132.0 mの等高線がきれいな円弧を描いており、北側の墳丘裾も明瞭に認められ、築造当初の形状を保っていると考えられる。

以上の結果を踏まえ、原状を留めると思われる北側部分から推測すると、墳丘の規模は長径14メートル、短径約13メートル、高さ約4メートル程度であったと考えられる。また、背後の丘陵との間は、溝でもって切断を図るものの不徹底であり、高畑通2号墳の状況に近似している。(上井佐妃)

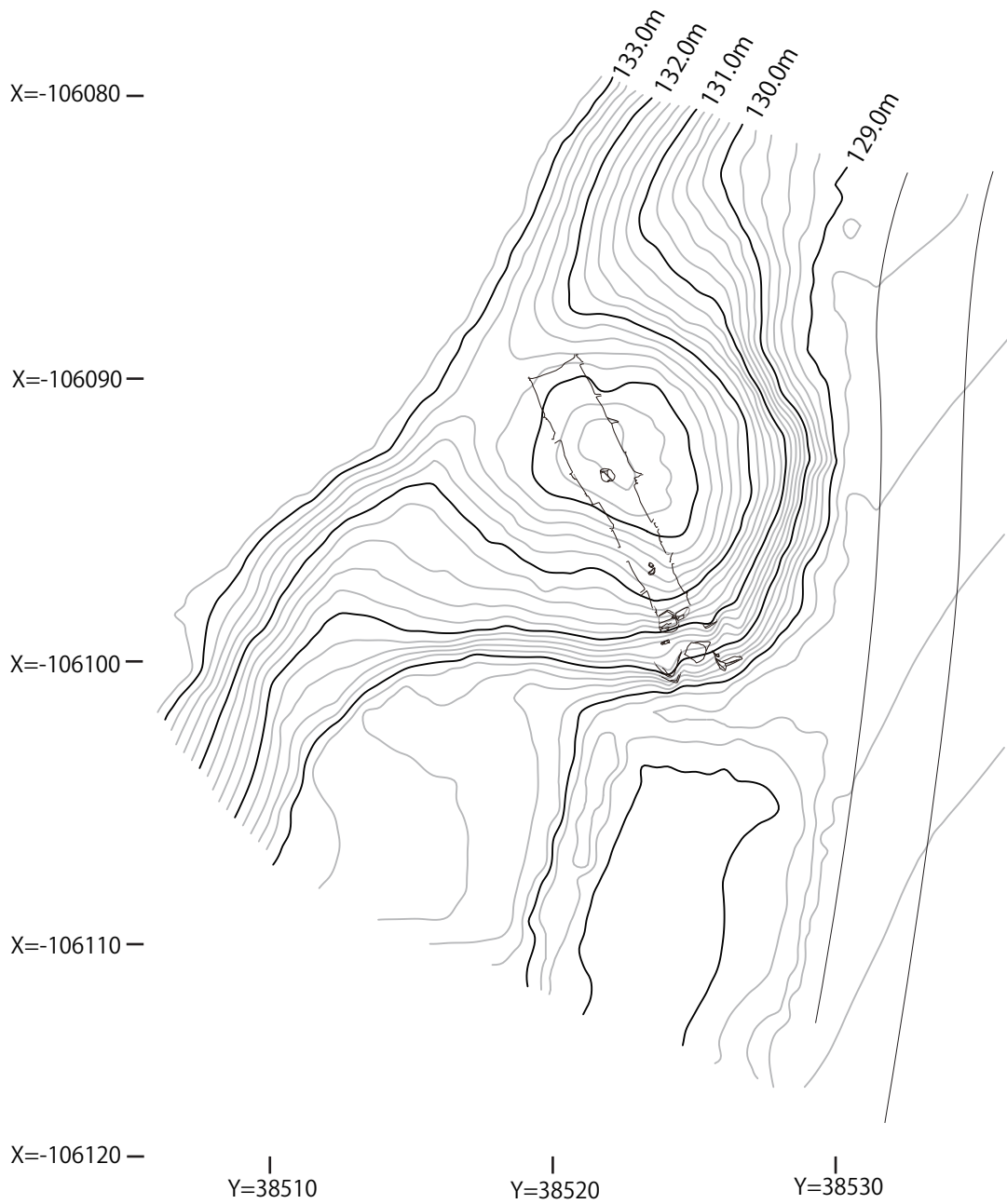


図2 山王1号墳の墳丘図（縮尺 1/250）



写真1 山王1号墳の墳丘（開口部）



写真2 山王1号墳の墳丘（背後から）

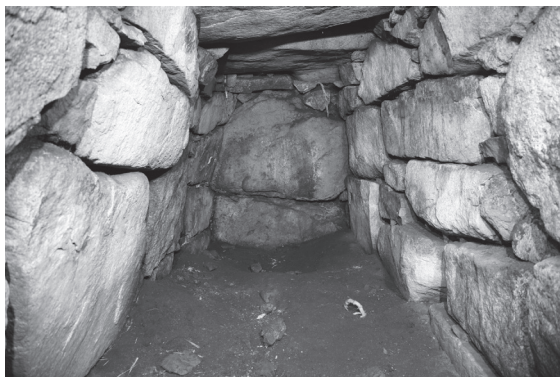
4. 石室

山王1号墳の石室は、南東方向に開口する両袖式の横穴式石室で、主軸は座標北を基準としてN-25°4'-Wの方位をとる。奥壁から開口部までの現存長は10.4mを測る。残存状況としては開口部に崩落がみられ、石材が付近に点在している。開口部付近の状況から、築造時の全長は12.9m程度であったと推測される。

平面形は、左右に袖をもつ両袖式で、袖部の幅は左右とも0.2mをはかる。玄室長は5.3m、玄室幅は2.0mを測る。玄門部では幅1.4m、現況の羨道長は5.4m、羨道幅が玄門部付近で1.4m、開口部付近で1.2mをはかる。右側壁では、基底石が奥壁から開口部に向かってわずかに内側にずれながら配置されているのがわかる。土砂の流入がみられるため石室内の基底部からの高さを知ることはできないが、表土からの高さは玄室部奥壁付近で2.3m、玄門部付近では2.1mを測る。羨道高は玄門部付近で1.6m、開口部付近で1.2mを測る。

天井石は玄室部に3石、羨道部に3石の計6石で構成されており、奥壁から開口部に向かって低くなるように傾斜している。羨道前壁と側壁の袖石が対応しておらず、袖石が右側壁では約0.5m、左側壁では約0.7m奥壁側にずれる。右側壁の袖部は幅1.1m程度の長方形の石材と幅1.7m程度の横長の石材で構成されている。一方で左側壁側は、幅1.7m程度の長方形の石を、幅1.5m程度の石と幅0.4mと程度の小ぶりの石で支えるように袖部を構築している。奥壁は3段で構成される。幅2m、高さ0.7mほどの横長の石材を最下段に置き、その上に幅1.9m、高さ1.4m程度の大型の石を積み、天井石付近に小ぶりの石材で充填している。側壁については、左側壁は直線的に構築されているが、右側壁は内側に傾斜するように石が積まれる持ち送りがみられる。左右で壁面の傾斜が異なるのは、左側壁を優先的に構築し、右側壁を天井石の幅に調節しつつ築造したためと推測される。玄室側右側壁には幅1.5m、高さ1.2m程度の大型の2石が中央に据えられており、その上に横長の石材を2段積んで構築している。右側壁玄門部付近では、2段目の石材の上に空白を持ちながら幅0.8m、高さ0.9m程度の石材が積み、最上段には幅0.2~0.3m程度の小型の石材を多くもちいて充填している。一方で、玄室部左側壁は最下段から長方形の石材を積み上げ、最上段は幅0.1~0.3m程度の小ぶりの石を多くもちいている。両側壁とも標高131.6m付近で比較的目地がよく通る。羨道部側壁は、3段で築造されている。羨道部右側壁は、横長の3石を2段積み上げ、3段目に厚さ0.2m程度の薄く横長の石を使用している。3段目の目地は、前壁が下方に張り出す部分と一致する。標高130.2mと標高131.0m付近でよく目地が通る。羨道部左側壁側も3段で構築されるが、開口部付近の3段目には比較的小ぶりの石が多くもちいられている。標高130.3mと標高130.8m付近で目地が通る。

全長や玄室長、玄室幅などをみても、この横穴式石室が大型のものであることがわかる。その規模は、市川流域でも有数なものである。



(近藤史昭)

写真3 山王1号墳石室内部

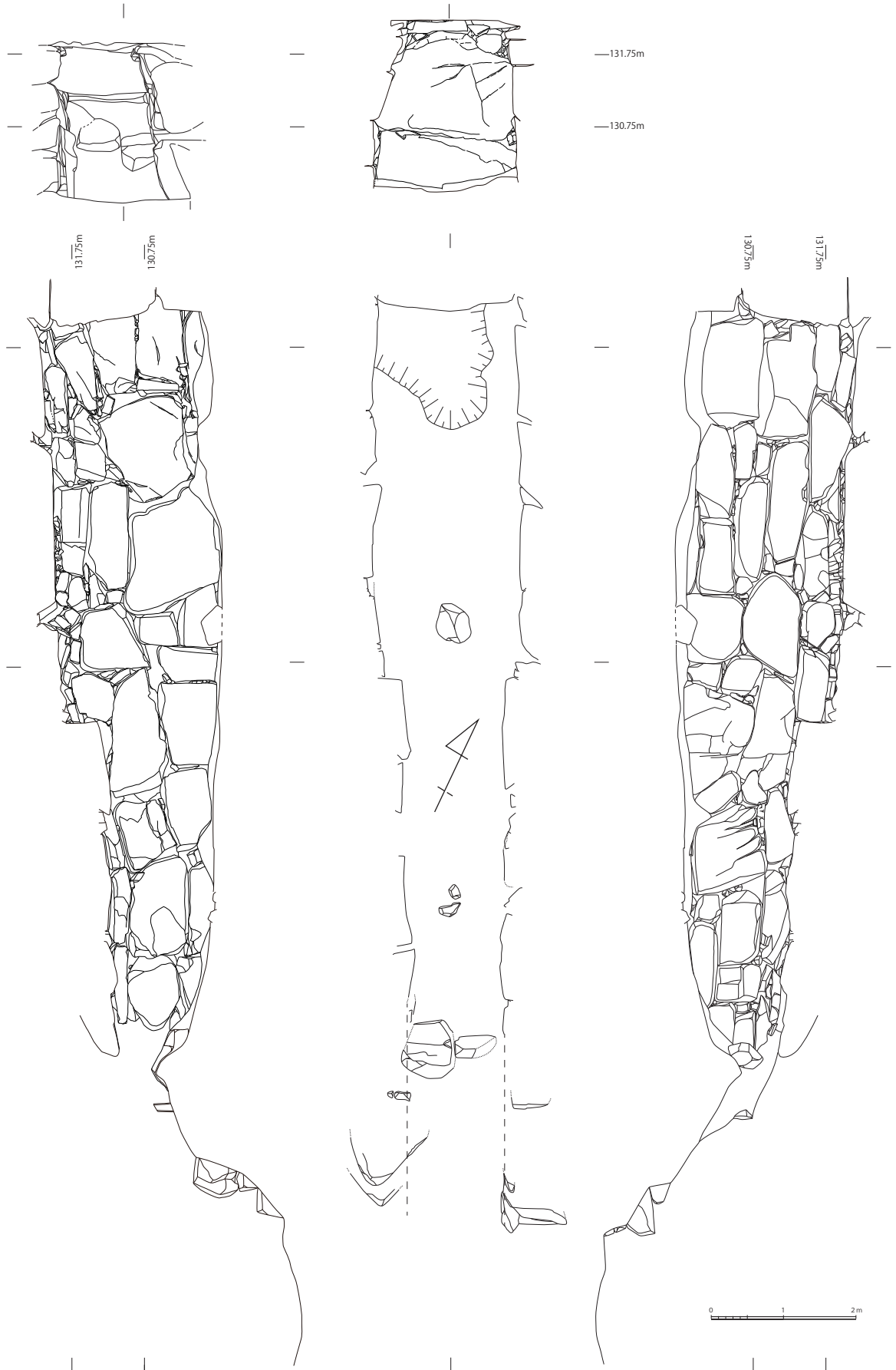


図3 山王1号墳石室実測図 (S=1/80)

5. 山王1号墳の位置づけについて

今回の測量調査によって、山王1号墳は、全長12.9mと市川上流域で最大規模の横穴式石室を有することが確認された。ここでは、山王1号墳の横穴式石室（以下、本例）の形態的・構造的特徴について紹介しつつ、周辺地域の資料との比較からその位置づけについて検討したい。

まず、石室の平面形からみた形態的特徴についてであるが、全長12.9mという数値は、市川流域では姫路市研堀権現山古墳に次ぐ規模となっている（表1）⁽¹⁾。玄室の形態は長さ5.28m、幅2.05mを測り、玄室比（玄室長÷同幅）は2.58である。播磨地域における大型横穴式石室の玄室比は2.00前後であることから、本例は播磨地域でも玄室が細長く長大化した例といえる。長大化の要因については、中濱久喜氏が指摘しているように、地方では奥壁に幅の広い一枚石を採用することが困難なため、一定の玄室空間を確保する手段として採用された形態と考えられる（中濱2002）⁽²⁾。

また、羨道長比（全長÷羨道長）をみると0.59となり、播磨北部地域に所在する大型横穴式石室の中でも全長に対する羨道の割合が増大していることがわかる。玄門部の形態については、本例は従来より右片袖式と評価されてきたが（中濱2002・2016）、今回の調査によって両袖式であることが確認されたことは大きな成果といえる。

次に、立面図からみた構造的特徴をみていきたい。本例は、石室内に大量の土砂が流入しているため、石室基底部の構造が不明である。しかし、石室開口部の石材の露出状況から羨門部の基底部の高さが大まかに判明しており、それをもとに石室内の高さを推定することは可能である（図4）。羨門部から奥壁までの基底部の勾配については、多可町東山古墳群の発掘調査成果から長さ1mあたり約4cmと想定すると、本例の奥壁部分の玄室高は約2.90mとなる（中町教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室1999・2001）。玄室高の復元と現状の測量図を比較すると、奥壁の基底部には大型石材が一石分存在すると想定でき、大型石材2段＋小礫積みという奥壁構造が復元できる。

玄室側壁については、概ね4～5段積みで構成されており、横長の石材が多く使用されているが、特に大型の石材は縦長を志向する傾向が見受けられる。さらに、左右の壁で石材の積

表1 播磨北部地域の大型横穴式石室一覧（全長10m以上、数値単位はm）

古墳名	所在地	郡名	全長	玄室長	玄室幅	玄室比	羨道長	羨道長比	備考
山王1号墳	市川町	神前郡	12.9	5.28	2.05	2.58	7.62	0.59	両袖
妙徳山古墳	福崎町	神前郡	12.4	6.00	2.40	2.50	6.40	0.51	右片袖？
山崎大塚古墳	福崎町	神前郡	12.3	6.60	1.80	3.66	5.70	0.46	右片袖
大門・池ノ下古墳	福崎町	神前郡	14.0	5.60	2.00	2.80	8.40	0.60	袖不明
神谷古墳	福崎町	神前郡	11.1	4.50	1.34	3.35	6.6	0.59	無袖？（前壁あり）
研堀権現山古墳	姫路市	神前郡	14.1	4.10	2.00	2.05	10.0	0.70	右片袖
鴨谷大塚古墳	加西市	賀毛郡	11.0	5.45	2.30	2.57	5.55	0.50	両袖
堂山古墳	加西市	賀毛郡	(8.10)	6.10	2.10	3.33	(2.00)	-	左片袖
ヤクチ4号墳	加西市	賀毛郡	10.7	5.00	1.70	2.94	5.70	0.53	右片袖
入角南1号墳	多可町	託賀郡	10.8	4.85	2.05	2.39	5.95	0.55	両袖
入角113号墳	多可町	託賀郡	13.5	6.10	2.20	2.77	7.40	0.54	右片袖
東山1号墳	多可町	託賀郡	12.5	6.25	2.80	2.23	6.25	0.50	左片袖
東山10号墳	多可町	託賀郡	12.0	6.20	2.10	3.26	5.80	0.48	両袖
東山14号墳	多可町	託賀郡	11.3	5.20	1.30	2.42	6.10	0.53	右片袖
東山15号墳	多可町	託賀郡	12.4	4.40	1.80	2.44	8.00	0.64	両袖

み方の様相が異なる点が特徴としてあげられる。具体的には、左側壁は羨道天井石のレベルで目地が通り構築単位が明瞭であるのに対して、右側壁ではこうした構築単位はほとんど確認できない。

また、奥壁と側壁の接合部についてみると、右側壁の石材が奥壁石材を挟み、左側壁の石材は奥壁石材にぶつけられていることから、少なくとも左側壁は奥壁基底部の位置が決まった後に構築が開始されたものと考えられ、右側壁が左側壁よりも優先して構築された可能性が示唆される。

玄門部については、袖石と前壁の対応に顕著なずれが認められる。このずれは、市川中流域の福崎町妙徳山古墳などにも認められ、畿内の石室の情報が忠実に再現されていないという点で地域性の一つと考える。さらに詳細をみると、袖石と想定される石材の上方に横長の石材が積まれており、これが前壁とのずれを生む要因の一つとなっている。こうした玄門部の特徴は同じ古墳群内の山王2号墳でも確認でき、古墳群内において石室の構造が共有され系譜関係が続いている点は興味深い（図5）。

羨道部の立面形については、玄門部からみた第1天井石が他の羨道天井石よりも一段下がっていると判断できる。その落差は10～20m程度とそれほど大きくはないものの、羨道右側壁の最上段石材の目地が第1天井石の高さと一致していることから、意図的に段差を形成したいわゆる楣石であると評価したい。こうした右側壁の様相に対して、羨道左側壁をみると、第1天井石と側壁最上段石材の目地が一致せず、右側壁との様相の違いが鮮明となっている。

本例にみられるような楣石と羨道側壁の対応関係については、他地域に類例が認められ、朝来市城ヤブ1号墳においても楣石と羨道右側壁の最上段石材が対応するのに対して、左側壁が対応していないという特徴が見てとれる（図5）。築造年代としては城ヤブ1号墳の方が先行すると考えられることから、こうした構造の系譜は生野峠を越えた但馬地域に求められると考える。なお、同様の特徴は福崎町神谷古墳にも認められ、その系譜はより下流の市川中流域

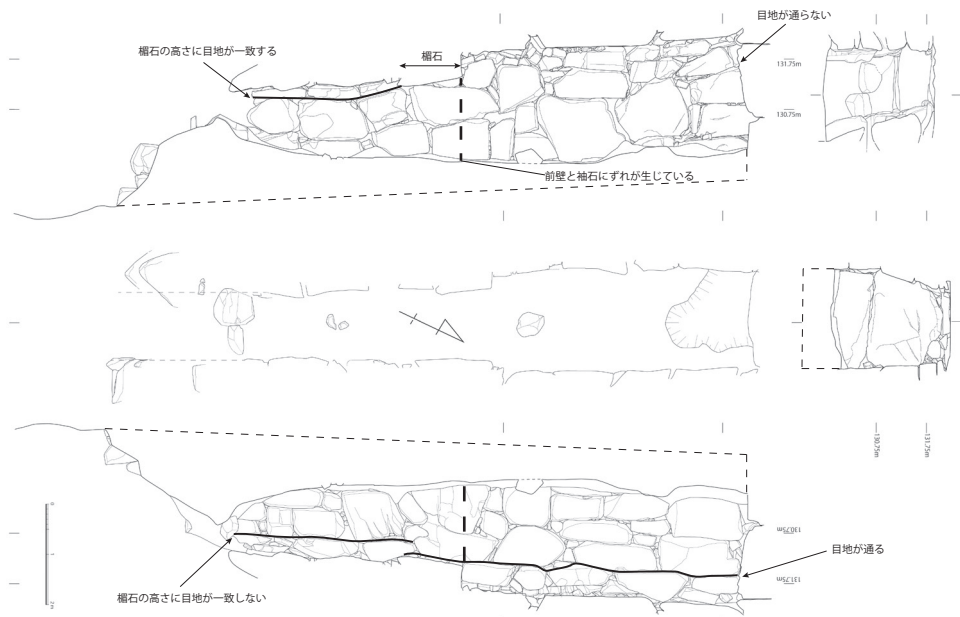


図4 山王1号墳における横穴式石室の特徴 (S=1/150)

まで続いている可能性がある。

以上、検討してきた点をまとめると、本例は、南東方向に開口し全長 12.9 mを測る大型横穴式石室であり、市川上流域における最有力者の墳墓である可能性が高い。その被葬者の支配領域としては、『播磨国風土記』に記載される神前郡埴岡里の地域が有力候補としてあげられる⁽³⁾。

石室からみた古墳の築造年代については、奥壁に大型石材 2 石の使用が想定できる点、羨道の長大化が進行している点などから 7 世紀前半頃の築造と推定し、同じ神前郡内の妙徳山古

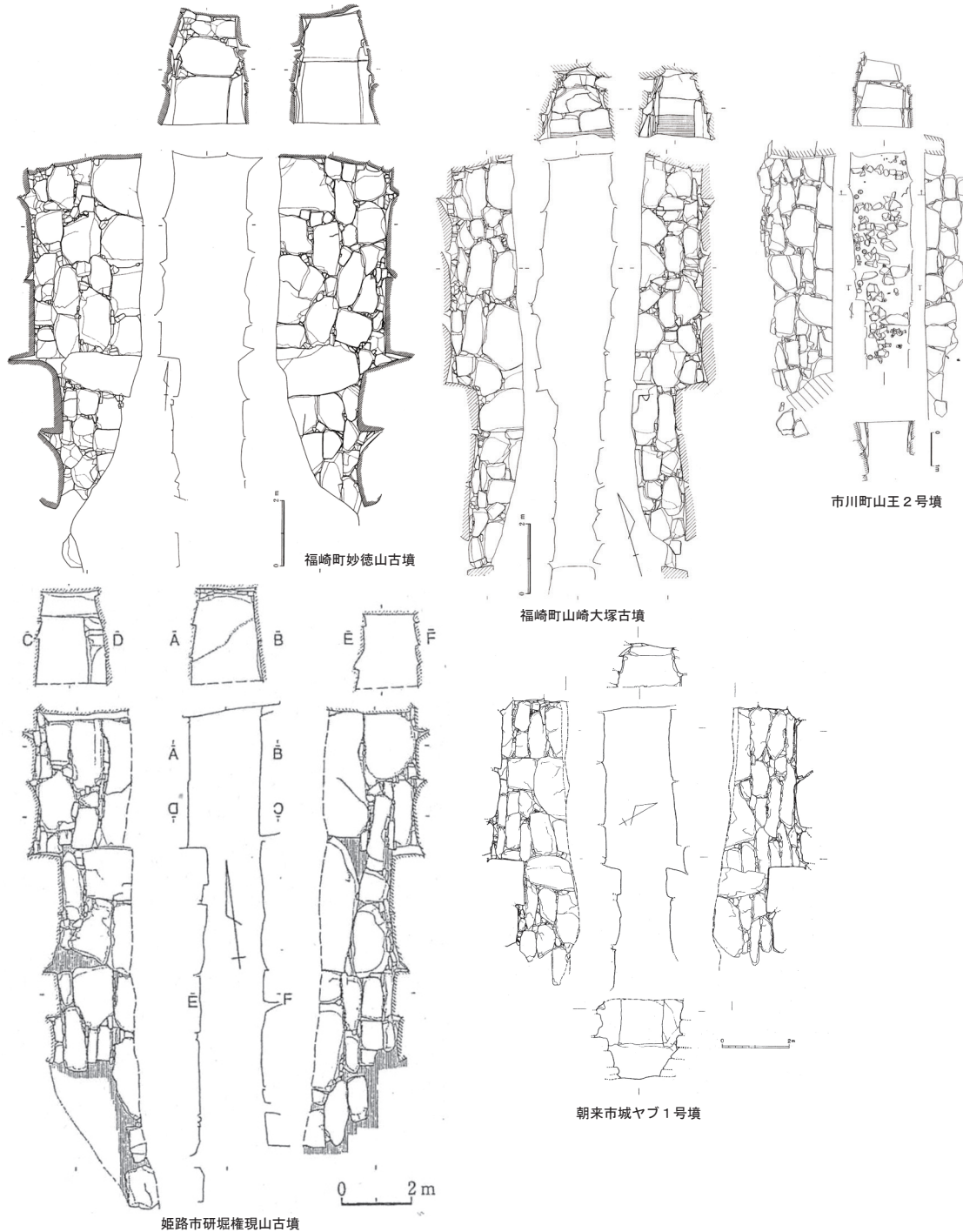


図5 山王1号墳の関連資料 (S=1/200)

墳や山崎大塚古墳に後続し、研堀権現山古墳に先行する時期の資料と判断したい。なお、同じ古墳群の山王2号墳との関係については、出土資料の様相からほぼ同時期かやや2号墳が先行して築かれたと考え、玄門部の構造が類似している点は、石室の情報が共有されるほど緊密な関係にあったものと評価したい。

石室の系譜はというと、玄室形態が長大である点が特徴的であり、玄門部の特徴なども含めて市川流域の他地域の資料と類似する点が多く、畿内の影響よりも播磨北部地域の地域性が強く読み取れる資料であると位置づけられる。その上で、播磨地域でも類例の少ない楣石を有する点や羨道側壁の構築方法との対応関係についてみると、播磨地域よりもむしろ但馬地域からの影響が見てとれることが判明したことは非常に興味深い。この点については、播磨地域と但馬地域の境界に近く、両方を行き来する交通路上に位置しているという立地の面から、地域間の交流によって石室構造の情報がもたらされたものと可能性が考えられる。ただし、そうした地域間交流の実態については、各地域の石室資料を階層ごとに詳細に分析する必要があり、今後の課題としたい。

（藤原光平）

【註】

- (1) 全長 14.0 m とされている福崎町大門・池ノ下古墳は現在消滅しており実態は不明であるため、表 1 に記載しているが、検討対象からは除外している。また、全長の近似する福崎町の妙徳山古墳と山崎大塚古墳はいずれも全長 12 m クラスであるが、開口部が埋没していることから、今後の調査によって全長が伸び序列が変更となる可能性がある。
- (2) 播磨北部地域（神前郡・賀毛郡・託賀郡）の大型横穴式石室の玄室比は 2.5 ～ 3.0 前後と播磨の他地域と比べて高く、細長い玄室の資料が比較的多くなっているが、これは丹羽恵二氏や筆者が指摘している、当該地域に大型無袖石室が多く分布することと関連するものと考えられる（丹羽 2001、藤原 2017）。
- (3) 本例はこれまで川辺里の首長墓と位置づけられてきたが（中濱 2016）、近年実施された分布調査の成果によって隣接する神河町新野地区周辺が古代の有力地域であると判明してきたため、山王古墳群は北側の埴岡里の墓域と位置づけるのが妥当であるとする（京都府立大学文学部考古学研究室 2017）。

【図版出典】

表 1：筆者作成、図 4：測量図をもとに筆者作成、図 5：松本ほか 1990、市川町 2005、中濱 2010、和田山町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会 1993 をもとに筆者作成

6. まとめ

これまでの神河町域における測量調査の結果、城山古墳群、高畑通古墳群の実態があきらかになったのに加えて、市川町山王1号墳の測量ができたことにより、市川上流域の主要な横穴式石室の基礎資料をおよそ完成することができた。地域の後期古墳を悉皆的に検討したことから、播磨国神前郡（神埼郡）の様相の解明にとっても重要な手がかりになるものとする。市川流域を群域とする神前郡は、より南側に政治的な中心があったと考えられるが、『播磨国風土記』が伝える土師氏に関する伝承からは、南北のつながりも深かったと推測できる。横穴式石室の形態についても、5 項で触れている通り、神前郡内の南北の関係の深さが明らかにな

っている。群域のまとまりがいつどのように形成されたかを知るうえで、横穴式石室が示す関係の把握が重要であることは論をまたない。

一方で、市川上流域では後期古墳の過度の集中はみられず、均等に分布する状況がうかがえた。どنگりの背比べのような村落首長の点在を想定してよいかもしれない。その中では山王1号墳がやや抜きん出た存在であり、後世の新野庄を握る勢力を想定してよいかもしれない。さらなる検討のためには、サルガク遺跡や沢構跡における奈良時代の遺構、遺物のように、以後の展開も見通しながら、小地域ごとの歴史を丁寧に跡づけていくことが必要になると考える。

(菱田哲郎)

【参考文献】

市川町 2005 『市川町史』市川町史編集室

京都府立大学文学部考古学研究室 2017 「兵庫県神河町所在古墳群の測量調査」『京都府立大学文学部歴史学科文化遺産フィールド調査集報』第3号

鐵英記編 『サルガク遺跡・沢構』(兵庫県文化財調査報告 343)、兵庫県教育委員会、2008年

多可郡中町教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室 1999・2001 『東山古墳群Ⅰ・Ⅱ』

中濱久喜 2002 「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨』播磨考古学研究集会実行委員会

中濱久喜 2010 「権現山古墳」『姫路市史』第7巻下、姫路市

中濱久喜 2016 「考古資料からみた飾磨郡・神前郡」『考古学からみた播磨国風土記』播磨考古学研究集会実行委員会

丹羽恵二 2001 「多可郡における大型無袖石室について」『東山古墳群Ⅱ』多可郡中町教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室

松本正信ほか 1990 「福崎町の考古・金石文資料」『福崎町史』第3巻、福崎町史編集専門委員会

藤原光平 2017 「城山1号墳の位置づけについて」『京都府立大学文学部歴史学科文化遺産フィールド調査集報』第3号

和田山町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会 1993 「城ヤブ1号墳」『和田山町の古墳』和田山町文化財調査報告書第6集